～「豊かな感性」をはぐくむこと～
3つのお子様ランチ

ある遊園地のレストランで実際にあった話です。

ある日、若い2人がレストランに入ってきました。店員は2人がけのテーブルに案内し、メニューを渡しました。すると2人は、メニューを見ずに「お子様ランチを2つください」とオーダーしたのです。

店員は驚きました。なぜなら、規則でお子様ランチを提供できるのは9歳未満と決まっていたからです。

店員は、「お客様、誠に申し訳ございませんが、お子様ランチは9歳未満のお子様までと決まっておりますので、ご注文はいただけないのですが」と丁重に断りました。

すると、その2人がとても悲しそうな顔をしたので、気になった店員は事情を聞いてみました。

「実は…」と女性が話し始めました。

「今日は、天国へ旅立った私たちの娘の誕生日なんです。残念ながら娘は最初の誕生日を迎えることが出来ませんでした。娘が私のおなかの中にいる時に、『3人でこのレストランでお子様ランチを食べようね』って話していたんですが、それも果たせませんでした。娘の誕生日の今日、3人でレストランで食事をしようと思ったものですから…」

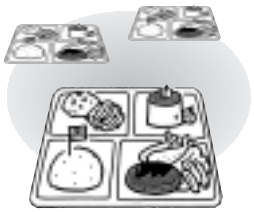
店員は話を聞き終えた後、少し何かを考えていた様子でしたが「かしこまりました」と答えました。

そして、あらためて4人掛けの広いテーブルに案内しました。

さらに、「お子様はこちらに」と2人の間に子ども用のイスを用意しました。

やがてそのテーブルには、お子様ランチが3つ運ばれてきました。そして、店員は笑顔でこう言いました。

「ご家族で、ごゆっくりお過ごしください」



後日、レストランに届いた手紙にはこう書かれていました。

「お子様ランチを食べながら、涙が止まりませんでした。まるで娘がここにいるように、家族の団らんを味わいました。こんな体験をさせて頂くとは、夢にも思っていませんでした。

これから、前を向いて生きていきます。そして来年も再来年も、娘と一緒にこの遊園地に来ます。

そしていつかは、弟妹を連れて行きたいと思います」と。

この話のように、毎日の生活の中で出会うさまざまな人々や出来事に対して、「自分のことを大切にするように他の人のことも大切にする」気持ちを持って、自分に出来ることを考え、行動に移していくことが「豊かな感性」をはぐくむことにつながると思います。皆さんはどのように感じられましたか？

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名 335

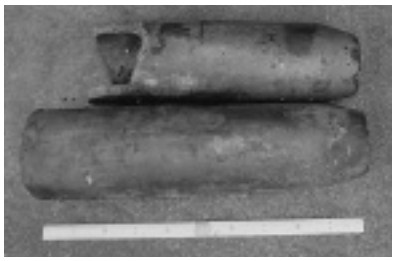
矢嶋姉妹周辺⑳

実学党首横井小楠は、明治2年1月5日、京都で暗殺されますが、翌年から実学党は次々と明治政府と熊本藩庁に登用され、元田東野、米田虎雄、荻昌之は明治天皇側近に、矢嶋直方も土木大丞、権参事官、左院議官を歴任。弟子たちは小楠の遺志を継ぎ、新しい政治の実現に努力しました。「肥後の維新は明治三年に来ました」(徳富蘆花著・竹崎順子)

直方は、明治7年静岡県参議の時、上司と意見が合わず、翌8年、辞職して杉堂に引退し、そして「而して共同風呂を作って、村民を入れたり、赫い着物の懲役を使って杉堂川の改修をしたり、杉堂王国の君主として有り難がられたり迷惑がられたり」(徳富蘆花著・竹崎順子)、また津森村郷土誌の記録を意訳すると「帰郷以来村の道路を作り、潮井宮から字上古閑に清水を引き数戸を移し、当時何処にも無い小学校を屋敷内に建て、広く付近の村々の児童を教育し、また林に櫨を植え、畑には茶を植え、村人数人を宇治で茶の製法を学ばせ、製品を各地に販売し、事業を拡張した。他にも潮井から水道を引き、邸内に浴場を作り、夕方農作業帰りの村民に自由に入浴させるなど、自費を投じて民政に尽力。ために晩年二十五町の伝来の田畑を全て売りつくし、貧しくても意に介せず、明治十八年七月二十六日六十三歳で逝去」しました。

杉堂には、櫨山跡が微小地名『櫨段』として残り、また、筆者が所有する2本の土管は40数年前、旧矢嶋邸の片隅で発見し、真夏の8月汗だくで地下30センチから掘り出し、御当主から譲り受けたもので、直方が潮井宮から水を引いたことを証明する貴重な水道管の遺品です。

益城町文化財を訪ねる会
会長　松野國策



直方が潮井から引いた水道管（水道管手前にあるのは50cm物差し）